W10-Operations Research Methods and Applications/Management Science Research in Small Business
W11-Energy—A World View
W12-Long Range Planning
W13-Health Care
W14-Applications of O. R. to the Management of Disturbed Ecosystems

4. カナダにおけるOR

年次大会に見るCORS(カナダOR学会)の横顔

眞鍋 龍太郎

Berkeley の California 大学に昨年9月から約10か月滞在する機会を得た．その間に5月15日(月)～18日(木)に，カナダ西海岸の Vancouver で開かれたカナダOR学会（CORSと略す）の年次大会に出かけていった．この大会を通じて，IFORS '78 Canada を催してくれた CORS の横顔をのぞいてみよう．

Only 800 members, but……

CORS の会員は800人前後であり，Vancouver には140人余が集まった(そのうち非会員が50人，アメリカから15人うち3人は会員)．800人というと日本の学会の半分以下だ．しかし，カナダの人口が2千万人ということを考えると，ORの浸透の程度はカナダのほうが深いかもしれない．実際に研究発表をのぞいて見てそう感じられた．オペレーショナル・レベルの問題でもマネジメント・レベルの問題でも実際に使った話が多かった．

会員の多数はこの国の東のほうに集中しているので，年1回の大会もどうしても東のほうにかたより，Vancouver で開いたのは，5，6年ぶりとのことだ．日本でも，九州で学会をすると，実行委は北海道からの参加にはうれしくなるが，ここでも同様に遠来の客は歓迎された．水曜の夕食会で，時差が4時間もあるカナダの東の端 Nova Scotia 州 Halifax からの人が，実行委員長から紹介されたときには Vancouver の人たちは「ホー」と声をあげた．同時に from Japan via California と小生も紹介してもらえた．

OR in 1980's

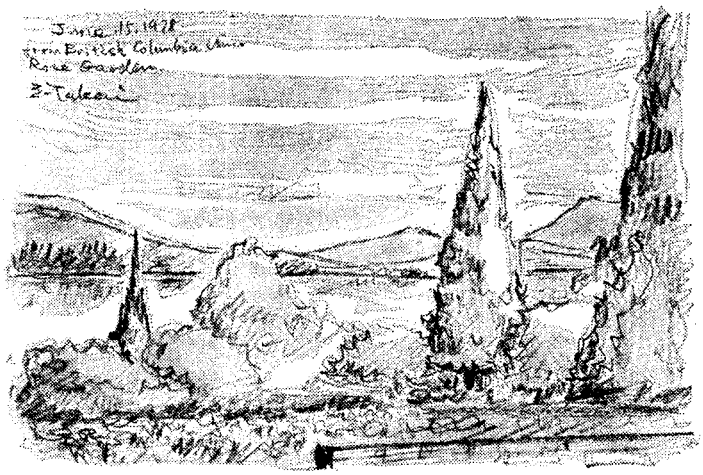
今回のテーマは「1980年代のOR—その仮説，方法と技術」である．月曜の午後にはじまる大会はまず全体会議で，プログラム委員長がこのテーマのイントロダクションを15分ほどしてから，特別講演で，問題の提起と高度な見地からの展望を示された．そして，このテーマに関連して，

—ORの成功と失敗の解析，
—適当なモデルの選択，
—戦略的計画における意思決定，
—1980年代の手法とより困難な時代に使用可能なモデル，といったセッションがあった．このうち，第1のセッションで，プログラム・チェアマン J. Roberts 自身が「ORの成功と失敗のノンテクニカルな要因」という発表を，コンサルティングの豊富な体験にもとづいて行なった．

また4つ目のセッションの Univ. of Waterloo の E. Silver の「ヒューリスティックな方法の解説」は，ヒューリスティックスが複雑な構造の問題の現実的解法に今後ますます使われることを考えたうえでのものであり，また R. Burns の「すばやいが見苦しい方法」は，オペレーショナルなレベルでの役に立つ方法は簡単に使えるけど理論的にはあまりカッコのよくないもので，それはこん

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

バンクーバー　ブリティッシュ・コロンビア大学ローズガーデンより入江をのぞむ



なものだと説明を試みたものである．実はそんなヒューリスティックスとか簡便法がかなり使われてきているわけで，そういうものをこれからも発展させるための助けとして興味ある発表だった．

Well-organized conference

特別テーマの各セッションは，プログラム・チェアマンと各座長，発表者のあいだのコミュニケーションがプログラムを決める段階でしてあったようだ．これらのセッションは，座長がそのセッションのイントロダクションをまずしてはじめるので，各発表はそれにしたがってすぐに本論に入れるようになっていた．また質疑討論も，各発表の他に，最後に全体を通じての討論をしていた．

特別テーマのセッションの中には，オリジナルな研究発表だけでなく，解説のようなもの(tutorial とよばれるもの) もいくつかあったが，これはそのテーマについてなじみの薄い者にとって非常にありがたかった．

一般発表のセッションは，日本の学会のように応募された発表を適当にまとめて，“たのまれ”座長が進行係をしているものもあったが，前記の特別テーマの部屋と同じような準備のもとで行なわれているものもあった．

日本の学会でここ数年春の東京での研究発表会の前日にシンポジウムというのをやり，これが上の特別テーマのセッションのようにやってきたが，これはシンポジウムよりも小さい規模のもので，われわれの学会もこの形式をもう少し真似したらよかろうと感じた．

日本との仕事のしかたやマネジメントの違いが学会の運営にもあらわれている．プログラム・チェアマンがいても，その他にプログラム委員がいるわけではないようだ．チェアマンが自らの発想と責任のもとで，プログラムを構成し，座長をたのんでいる．座長も自らそのテーマの発表者を集めているらしい．だから，チェアマンの考え方の特色や人柄がよく出ている．今回は B. C. Research (British Columbia 州のコンサルタント機関)のマネジメント・サービス部門の長の John Roberts が実務・学界両面から非常にバラエティのある人たちを集めて，しかも，問題を，机の上で，あるいは2階から，上空からとちがった見方をするように構成してきた．

日本の学会では，委員を大勢決めて何かすることが多いし，これが日本流の仕事をうまくやるコツでもある．しかし，1人あるいは数少ない人が運営して独断と偏見に満ちた研究発表会のセッションがあってもおもしろかろう．

発表の内容は理論的なものもあるが，現実の問題と取り組んだ結果のものが多く，それに学会自体力を入れているらしい．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

これは，あまりORが進んでいなかったものの経済の発展と社会構造の複雑化によって，システムズ・アプローチが必要になり，国土が広大なこともあいまって，新しいノウハウが要求されて発展してきたと考えられる．その際に，地理的条件や，ことばの壁のないことから，国外からも，とくにアメリカからも人を引張ってきて仕事をさせているようだ．

Friendly atmosphere

このCORSの特徴のひとつは，雰囲気の柔らかさ，なごやかさだ．アメリカ人は親しくなるとファースト・ネームでよびあう．一杯一緒に飲んだらそうする．ところが，CORSの大会では，ロビーで会ったときにも，ファースト・ネームを繰り返し聞いて確かめ，以後もそれでよびあうので面喰らった．

ことに参加者の多くが，地元の人を除いては，会場のホテルに泊っていることもあって，四六時中参加者の誰かと顔をあわせているわけだ．そして，第1日(月曜)の夜のVancouver支部主催の歓迎レセプション，火曜の昼食会，水曜の夜の夕食会と，ほぼ全員が出席し（参加費に含まれている）新しい仲間をつくり，あるいは議論をできるのはよかった．こんな宴会のたぐいも，決してぜいたくな食事ではない．日本でやると気張ってデラックスにしたがるが，カッコが悪いという言葉のないところでは，飲物とクラッカー，チップだけがさっぱりしたものである．Vancouverのレセプションはいろいろあったが，IFORSのレセプションは本当にクラッカー，チップスだけだった．

セッションの座長も，いたってインフォーマルに話をして，発表者をファースト・ネームのみでよんで紹介したりしている．こんなことは，国際会議になっても反映して，日本でやったときのように“開会します(I call this session to order)”などといわずに，やんわりはじまっているものが多かった．

5月初旬にNew YorkでORSA/TIMSの春の大会があった．これに出かけていったBerkeleyのある先生に聞いたら，「街はよかったけど，会議はovercrowdedで興味が湧かなかった」といってたのと対照的である．2,000人以上も集まると，ごく限られたセッションをのぞき，それだけで帰ってくることになるようだ．

5. OR視察団報告——アメリカ・カナダにおけるORの実践例

5.1 OR視察団について

島田俊郎

視察団のセミナーに関するカナダ，米国との交渉には，大阪大学横山保，東京工業大学松田武彦両先生に大変お骨折りいただいた．視察団構成までの交通業者との交渉，米加のセミナー世話役との交渉には，早稲田大学の出居茂氏，慶応大学の川瀬武志氏が骨を折られた．加えて学会事務局のご協力により，視察団は実現の運びとなった．

セミナーの目的は，米国，カナダでORがどのように実践に移されているのかを知ることにあり，カナダのセミナーは，ブリティッシュ・コロンビア大学のL. G. Mitten教授に，ニューヨークのセミナーは，McKinsey社のDr. Hertz(現IFORS会長)を介してニューヨーク大学のM. F. Shakun教授に，シカゴのセミナーは，Shakun教授を介してイリノイ大学のJ. H. Engel教授に，それぞれ依頼された．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．